

令和8年2月8日(日)付

談論

風発

834

島根県立大学学長

山下 一也

大学の学びの価値



医学博士、島根県立大学学長。1991年、島根県立大学に入学。卒業後、1994年に島根県立大学に勤務。その後、島根県立大学学長に就任。2023年4月、島根県立大学学長に就任。

「大学はオンラインで十分ではないか」。近年、この問いが現実味を帯びてきた。通学せずに学位取得まで可能なオンライン大学が生まれ、授業のオンデマンド化や公開講座の充実も進み、学ぶ場所の制約は確実に崩れつつある。働きながら学ぶ社会人や、家庭の事情で通学が難しい若者にとって、オンラインは学びの格差を縮める大切な手段でもある。

教育にとって前進であることは疑いない。地理や経済事情のために学びを諦めてきた人に、もう一つの入り口が開かれた。時間を選んで学べる。必要に応じてライブでつながることもできる。

だからこそ、ここで問い直さなければならぬ。通わない大学が成立する時代に、通う大学の価値とは一体何か。地方のキャンパスは、何を引き受け、何を社会に返すのか。

要するに、大学の価値は知識の伝達そのものではない。知識は検索でき、要約も翻訳も人工知能(AI)が担う。講義も動画で視聴できる。つまり「学ぶ内容」は、すでに場所から解放されたといえる。にもかかわらず、なお通う大学が必要とするなら、それは大学が単なる知識の配達所ではなく、人間が鍛えられる場ということになる。

オンライン教育の強さは、「同じ内容を、同じ品質で」届けられる点にある。しかし大学という場所が育てるのは、むしろ逆の能力である。つまり、同じではない現実を引き受ける力だ。人と人は違うし、地域も違う。その現実を、若いうちに身体で、感覚で知っているかどうかは、後で大きな差になると思ふ。

現場に入ると、統計では見えない現

「問う力」持つ若者を育てる

実がある。教室なら、問いは与えられる。正解もどこかにある。しかし現場では、問いそのものをつくることから始めなければならぬ。何を問題として扱うか。誰の声が欠けているか。どこに遠慮があり、どこに諦めがあるか。ここに大学の学びの核がある。

問いを立てる力は、オンラインでは弱まりやすい。オンラインは、画面越しに学び、必要な情報を集めるには適している。だが、沈黙の重さや場の緊張は伝わりにくいし、摩擦も起きにくい。こうした環境は、現実社会を生きる訓練にはなりにくい。一方、地域社会では「合わないから退出」はできない。自治会も、役所も、企業も、病院も、学校も、関係をほどき切れないまま続いていく。人間は逃げずに折り合いをつけながら生きる。大学の存在価値は、その練習をフィールド学習や実習などで学生に課す場所である。

ここで、私が大切にしている言葉を紹介したい。立命館アジア太平洋大元学長の出口治明さんの言葉である。

「人間は、人に会い、本を読み、世界を旅すること以外に賢くなる方法はありません」。学びの本質は、知識の量ではなく、視点の更新にある。日常の外へ出ること。人に会うこと。本に出会うこと。旅に出ること。遠くでなくてもいい。世界の裏側でなくてもいい。一歩外へ出るだけで、人は変わっていく。

従って、大学には責務がある。「何が問われているのか」を言葉にする若者を育てることである。問いを立て続ける人間が減れば、社会は必ず弱くなる。大学は、社会が失い始めた「問いの筋力」を守る最後の場所でなければならない。